

理由を目的化する

園長 児嶋 草次郎

先月の友愛通信で、宮崎県の小学校教員採用試験に合格した卒園生のSさん（岡山理科大学4年）のことを書きました。さっそくその後、後輩たちを鼓舞する手紙が届きましたので、その一部をまず紹介させていただきます。

「拝啓 今年はず年と比べ、まだまだ暑い日が続きそうですが、友愛園の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。私は2021年の3月に、じゅうじの家を卒園し、岡山理科大で教員を目指しているSと言います。今年の夏に宮崎県の教員試験を受け、無事合格することができました。（略）

施設で生活していた15年間は、自分は親と暮らせない可哀想な人、我慢ばかりしないといけないと思っていることが多かったようです。でも大学に行って、そうじゃないんだと気付きました。むしろ自分は救われていたんだ、しっかり常識のある者へと成長させてもらっていたんだと心底思いました。（略）

後輩たちに言いたいこと、伝えたいこと、たくさんありますが、一つ絶対に心にとめておいてほしい言葉があります。それは『置かれた場所で自分が楽しむ方法を考える事』です。施設の生活で嫌なこと、我慢しなければならぬことは、たくさんあると思います。なんで私だけが、なんでこんなことになって、マイナスになってしまうのもしょうがないです。でも一人で生きていくなんて、そう簡単ではありません。だったら楽しむ方法を考えましょう。（略）

最後に、夢は叶えるためにあるものなので、小さなことでも夢にしていき、自分は必ずできるんだと言い聞かせ、夢を追い続けてください。（略）」

9月23日明倫塾の時間にこの手紙を中・高生みんなの前で読み、次のような話をしました（少々加筆）。

友愛園は集団生活です。マイナス思考になってグチや不満を持つ者も多い。しかし、例えば、宮崎県立の五ヶ瀬中等教育学校も集団生活です。宮崎県全域から五ヶ瀬町の山の中の学校に集まり、中学・高校6年間、寮生活をしながら学校に通っている。また、今、アメリカ大リーグで大活躍の大谷翔平選手も、岩手県の花巻東高校時代は3年間寮生活をしている。その集団生活の何が違うのだろうと考えてみました。

みんなに何度か話をしてきたけど、友愛園に入って来る理由には三つある。①親の事情、②虐待、③自分の事情です。親の事情にも色々あって、経済力や養育力の問題、病気、その他。虐待も単純ではない。一方的な虐待もあるけど、自分事情がからまっているものもある。自分の事情はもっと複雑かもしれない。自分の事情+親の事情、自分の事情+虐待、自分の事情と分けられるかもしれないけど、中味は様々。ここにいるみんなは、それぞれにここに来た理由は違う。自分がどういう理由でここに来たのかを考えなければならない。もし、②や③でここに来たのであれば、親との関係を再構築して家に帰る努力をしなければならない。特に③の場合は、園生活を通し生活習慣力や自律力をつけて、親や児童相談所の信頼を勝ち取る努力を積み重ねなければならない。①の場合はどうだろう。家庭復帰は、なかなか厳しい場合もある。そういう状況の場合、どうしたらよいのだろう。

先ほどの五ヶ瀬中等教育学校との違いはどこにあるのだろうか。それは、五ヶ瀬の場合、みんな目的を持って入学して来るということ。例えば、宮崎市内に住んでいるとすると、親は我が子が誘惑の多い街の中で青春時代を送るより、大自然の中で学ばせたいと考えて、我が子を説得する。子ども自らそう考えるかもしれない。寮生活ではケイタイやゲームもできないけど、その代り、勉強にも集中できるし、大自然の中で人間性も豊かに育つかも说不定。集団生活を経験することで、忍耐力、自律力、チームワーク力、自立心等も身につけることができるだろうと考える。そしてその先に大学進学という目的が待ちかまえている。大谷選手だって同じ。甲子園に行く夢をかなえるため、花巻東高校を選んだのだろう。お父さんとどのような話し合いが行われたか分からないけど、将来、プロ野球選手になるための一番の近道は、花巻東高校に入学し、3年間寮生活をし、みっちり野球について学ぶという結論に達したので、入学したのだろうと思う。つまり、明確な目的をもって集団生活に挑戦しているということ。

みんなはどうだろう。おそらく半分だまされるようにしてここに来ている。自ら目的を持ってここに来たものは一人もいない。一人ひとりが先ほどあげた理由を引きずって来ている。つまり理由と目的の違いである。

しかし、18歳、高校を卒業して一步ここを出たら、社会はみんなをどう見るのだろうか。

「私は施設ですっと生活して来たので、自己コントロール力が弱いです。生活習慣力も未熟です。だから大目に見てください。」などと言って通用するのだろうか。もちろん通用しないね。社会に出たら皆同じ。親の事情で施設で生活したからなどということとはもう理由にならない。

だとするならばどうしたらよいのだろうか。それは、理由を目的化すること。理由に縛られたまま施設生活し、自分の運命を変えようともせずそのまま社会に出てしまい、失敗を繰り返すことになり、その時またそうなった理由を恨み辛みとともに吐いて世間を呪う。そういうのを世間の人たちは、貧困の連鎖という。施設否定論者たちは、そこを突いてくる。あの「新しい社会的養育ビジョン」(2017年)派の人たちは「だから施設はダメなんだ」と言わんばかりに攻撃してくる。施設養育が貧困の再生産を助長していると言っているようなもの。

理由を目的化するとはどういうことだろう。様々な理由で施設に入ってくる。それは運命として受け入れなければ仕方がない。小学生くらいまでは、深く考えることもできないだろう。しかし、中学生になったら、その運命と向き合うようにならなければならない。

まず、自分はどのようにして理由で入所したのかを、自分なりに整理すること。自分の未熟さ故に親に迷惑かけたのであれば、施設の集団生活を通し、基本的生活習慣を確立させ、自分の弱点の克服に努め、自律力をつけ、親子関係の再構築に努め、家庭復帰を目的化すること。

色々考えても家庭復帰はむつかしいと判断せざるを得ないと考えた時が運命の転換点となる。そこで発想を転換して、自分に与えられたチャンスととらえる。つまり、入所の理由を越えて、目的化していく。将来への夢や志を描いて、それに向けて努力を始める。そこまで心が整理できたら、もう施設での集団生活は、五ヶ瀬中等教育学校や花巻東高校の生徒たちと同じになる。この過去の整理とプラス思考による運命を変える努力の始まりは、できれば中学生の間にやらなければならない。中学時代を漫然と生活していたら、流されてしまって、運命は変えることは厳しくなってしまう。スイッチを入れる機会にしてほしいという思いで、日記や生活手帳を友愛園では書くことになっている。チャンスを逃さないでほしい。

みんなの先輩のSさんは、幼児さんの頃入って来て、やはりみんなと同じように色々悩んだりしたと思うけど、ある時から理由を目的化したのだろう。小学校の先生になることを目的化し、高鍋高校進学後大学へ進んだ。成績もそんなにずば抜けて良かったわけでもない。人間は志を持つと強くなる。そ

れ相応の努力をするようになる。頼もしく思うし、誇りにも思う。みんなもSさんに続いてほしい。

それから数日後、ある国会議員が秘書と訪ねて来られました。社会的養護の現場を知りたいという思いをお持ちのようでした。ありがたいことですし、私に与えられたチャンスですので、「友愛通信9月号」(390号)で書いた内容のことを、ベラベラとしゃべらせていただきました。

2017年(平成28年)8月に「新しい社会的養育ビジョン」が厚労省より出され、社会的養護(養育)の大改造が始まったこと。その「ビジョン」の文章の中にサブリミナル効果のように『乳幼児の原則として施設への新規措置入所を停止する』とか、『施設の滞在期間は原則として乳幼児は数か月以内、学童期以降は1年以内とする』等の文があり、その文言の削除を求めて署名活動をし、43325名分集めて、2021年(令和3年)に厚労省副大臣に提出したことなどを話させていただきました。乳幼児や児童養護施設は児童福祉法で保障されている施設であり、国会での議論もないままに、入所を停止させるとか制限するなど一方的に決めようとするのは、社会的養護の子供たちの居場所を奪うことにもなり、憲法違反であるとも主張させていただきました。

そして、最後に、これから世の中を変える人はどこから出て来るのか、大都会の二世三世の議員さんでは無理で、西郷隆盛がそうであったように、社会の底辺の生活を知っている児童養護施設出身者からではないか等、生意気なことも言わせていただきました。

それからまた数日後(10月1日)、私は、神戸市三宮で石井十次の業績を紹介する機会に恵まれました。宮崎県大阪事務所の甲斐所長様が三宮センター街2丁目商店街振興組合理事長久利計一様に糸をつないでくださったのです。

2009年から神戸市内の児童養護施設の小学6年生を沖縄に招待され続け、コロナでストップになると、2022年7月には市内の中1・2年生39名(9施設)を宮崎県内の旅行に、カーフェリーで招待されたのです。私はその事実を知らないままに出かけていき、後で送っていただいた資料で知りました。

その資料には、「誠実で強く温かな『神戸気質』が生まれて来る事を願っています。」と書かれてありました。久利様はこういうボランティア活動を通し、神戸人の友愛の魂を呼び覚まそうとされているのでしょう。恐れ入ります。講話の当日も始まる前、約80人の会員の皆様の前で、ウクライナより避難して来ている方々への支援金250万円ほどの伝達式が行われました。配られた資料を見ると、ロシアの侵略以降何度も募金活動が行われ、その支援金は総額1300万円を越えるそうです。そのような温かな『神戸気質』は、最近生まれたものではなく、おそらく、石井十次時代すでに存在していたのであろうと思われれます。

今回話をするに際して、神戸と岡山孤児院との関りを考えた時、思い出したことが二つありました。一つは、あの少年音楽隊を組織した時、最初に指導してくださった方が神戸の音楽師だったということ。それから、今の神戸女学院大学(当時は女学校)に、岡山孤児院の女学生たちが、何人も進学しているということ。

「石井十次日誌」明治29年7月22日に、三谷種吉氏が来訪し、「バイオリン風琴を奏し種々音楽談をせらる」とあります。経緯はよく分かりませんが、すぐに音楽部が結成され、三谷氏は部長に就任するのです。三谷氏との御縁は12月頃までだったようですが、この人のおかげで楽器がそろえられ、少年音楽隊が組織されたわけです。

ついでに明治30年の「石井十次日誌」を開いたら、3月10日に「神戸に着し」とあり、翌日11日には、「早朝女学校に五女を訪ふ」とあります。つまり、神戸女学校に5名の岡山孤児院の女生徒が在籍していると思われる記事です。外で昼食でも一緒に食べたのか、その後「ふく、きの、たま、なみ、いく女等女学校に帰る」という文も記してあります。

細かなことは研究者におまかせするとして、これらを読んでいると、世界に開かれた神戸の文化レベルの高さと友愛の『神戸気質』は、当時から脈々と続いているのであろうと感じさせられるのです。明治29年頃、バイオリンがひける人が日本人の中に何人いたのでしょうか。当時私立の女学校に、その寮生活を含めて通わせられる金銭的余裕が岡山孤児院にあったとは思われず、かなりの部分でボランティアの人々に支援を受けていたのでしょう。

講話は45分程度となりましたので、充分には伝えられなかったのですが、「地域の歴史と文化が生み出した児童福祉の父石井十次」という題で、一通り解説させていただきました。そこでも私は、これから世の中を良い方向へ変えるような人材は、児童養護施設の子供たちの中から出て来るのではないかと話を閉めさせていただきました。

あれから数日がたち、あれこれ思い出しながら考えています。岡山孤児院に入院するということは、天災人災で親を亡くした子が多く不幸なことであったのかもしれませんが。しかし入院した子供たちは、その文化や教育レベルの高さに感激し、過去の負の理由にとらわれず、大きな夢や志を持つ少年・少女に脱皮していったのであろうと思えるようになって来ています。つまり、その生活と教育を目的化していったのです。

その歴史や精神文化を、私たちはもう一度掘り起こし、子供たちに伝えていくことが必要でしょう。今、先人たちが築いた社会的養護の養育・教育文化やそれを支える友愛の和・輪・環が崩壊の危機に追い込まれて来ているのです。理由を目的化することに成功すれば、施設で生活する子供たちもりっぱに成長し、世のため人のために貢献する人材として成長する、そのことを、子供たちとともに証明していかなければなりません。

グローバル化して数字の世界標準に近づくことが進歩と考えるのではなく、先人たちの築いた歴史と文化の中で、運命を変えるスイッチの入れ方を研究することこそが、進歩なのだと思えます。それらは、現場の職員・子供たちだけでできるわけではなく、多くの支援者を獲得し前へ進むエネルギーをいただくことで成功するものでしょう。

この度招待してくださった神戸三宮センター街2丁目商店街振興組合理事長久利計一様は、さっそく団体として二口、石井十次の会（石井記念友愛社後援会）に入会してくださいました。今回の御縁に感謝です。ありがとうございました。私たちは私たちのやるべきことを、粛々と進めていきます。